〈翻　訳〉

中世後期英国史研究の最近の動向

アンソニー・J・ポラード（A.J. Pollard）
（ティーズサイド大学教授）
安元　稔　訳

以下は、2003年10月23日に駒澤大学深沢校舎小ホールで行われた英国ティーズサイド大学法文・国際学部（School of Law, Humanities and International Studies, University of Teesside）教授、アンソニー・J・ポラード氏（Professor Anthony J. Pollard）による駒澤大学経済学部公開講演、『中世後期英国史研究の最近の動向』（*Recent Work on Late-Medieval English History*）を訳出したものである。

ポラード教授は、中世後期英国史、特に15世紀政治史の専門家であり、主な著書に、*Late Medieval England, 1399-1509* (Harlow: Longman, 2000), *The Wars of the Roses* (Basingstoke: Macmillan, 2nd revised edn, 2001), *The Worlds of Richard III* (Stroud: Tempus Publishing, 2001), *Richard III and the Princes in the Tower* (Stroud: Alan Sutton, 2nd imprint with new preface, 2002) 等がある。教授は、日本学術振興会外国人招聘研究者として、関西大学文学部を拠点に、2003年10月6日から11月７日まで滞日し、各地の大学・学会でセミナー・公開講演・講義を行った。招聘・その他、万端の労をとって下さった朝治啓三教授に心から御礼申し上げる。

****

中世後期英国史研究の最近の動向という私の課題は大変大きなものであります。当初は中世史全般について話をするように言われましたので、そちらの方がもっと大きな課題となっていたでしょう。今回は話をもう少し短い期間、1350－1530年に限りたいと思います。理由の一つは盛り込む内容の範囲

であり、もうひとつは私の専門の限界であります。勿論、私は最近15年間に出版されたすべての著書や論文を挙げようとは思いません。むしろ、私は20世紀後半以降の学界で提起された幾つかの問題を取り上げ、それら中世後期の数世紀に関するわれわれの理解が、過去において、そして現在、どのように変わりつつあるのかを示したいと思います。そして、経済、社会、宗教、政治について幾つか論点をお話ししたいと思います。この時期を通じてイギリスには国王が10人おりました。現在でも尚、研究と出版物は個々の国王の治世に関するものが多いのですが、私は国王の治世に焦点をあわせてお話をするつもりはありません。

本題に入る前に、まず研究史の出発点をどこにするかを確認しておくことも意義のあることだと思われます。イギリスの歴史学界では、近代の実証史学の発展の後、長い間、中世後期という時代は無視されてきました。19世紀中期の偉大な歴史家であったウイリアム・スタッブズ（William Stubbs）の後に続いた2世代、あるいは3世代後の歴史家達は、この時代、中世後期という時期を取り挙げるべきものがほとんどない時代であるとして、捨て去っていたのです。確かに、近代のイギリス国家の諸制度の発展という点に照らしてみると、大きな進展は見られませんでした。輝かしき修道院の時代と中世の宗教的な熱情も過ぎ去っておりました。すべてが頽廃し、衰退しておりました。歴史家たちにとっては、この時代は、テュダー朝とルネッサンス、そして宗教改革が始まるまでのつかの間の過渡期にしか過ぎなかったのです。スタッブズの言葉を借りれば、「価値あるものはすべて衰えつつあり、死に絶えてしまうものもあった」のです。現代の中世後期研究は、20世紀中葉に、マクファーレン（K.B. McFarlane）とポスタン（M.M. Postan）によって再び息を吹き返しました。彼らの後に続いた歴史家が発見したのは、まだ利用されたことのない多くの史料が、中央・地方の文書館にあふれているということでした。それら史料の分析に基づいて、こうであったはずであると考える歴史像ではなく、この時代の実像を捉えることによって、われわれはこ

の時代を大幅に再評価してきたのです。

ポスタンは偉大な経済史家でした。先ず、中世後期の社会を形成した経済的諸力について見ることから始めたいと思います。ご存知だと思いますが、この時代は危機の時代であり、経済的な収縮の時代でした。飢饉と結びついて14世紀前半には深刻な危機があったということは受け入れられていますが、黒死病とそれに続く疫病の頻発（1348年と1390年の間に疫病は合計５回も襲ってきました）が、危機と経済的な収縮の決定的な要因であるという見方が最近では強くなってきました。また、この疫病が腺ペストとその変種であるという見方も批判されています。サムエル・コーン（Samuel Cohn）は、2002年に、アジアとヨーロッパの人口に壊滅的な打撃を与えたのは、「今は消滅してしまった」別のヴィールスであると示唆しております。この論文は、細菌形態学の詳しい研究に基づいた極めて興味深いものであります。その通りかもしれませんが、病気の種類が何であれ、高い死亡率と低迷する置き換え出生率の悪循環が重なり、人口は50年で半減したという点で研究者達の合意は確固としたものになってきております。ジョン・ハッチャー（John Hatcher）は、イングランドの人口は低迷を続け、15世紀の中期まで僅かながら減少し続け、15世紀の最末期に至るまで目立って増加し始めなかったと指摘しております。ハッチャーはまた、これに加えて、凶作とおそらくは流通貨幣量の不足と結びついた国際経済の低迷という二重の要因によって、15世紀の半ばにイングランドにおいては広汎な経済的な不振があったことを示唆しております。

これらすべては、衰退という伝統的な見解を確認しているように思われます。しかしながら、疫病に罹らず、生き残った人々には重要な見返りがありました。われわれは、先ずここで、イングランドは既にこの時期に高度に商業化された社会であったということを念頭に入れておかなければなりません。1300年以前に既にそうでありました。市場経済がこれほど深部にまで浸透し

ているこの時代の社会は、本質的な意味で、果たして、「小農社会」であったのか否かという点について、現在、活発な議論が展開されております。イギリスの借地農業経営者、小規模保有農民、そしてそれよりも豊かな独立自営農民（ヨーマン）は、市場向けに生産し、市場において生産物を交換しておりました。賃金を受け取って働く労働力は、かなり広範に存在しておりました。イングランドの幾つかの地域、特にイースト・アングリアやエセックスのいくつかの地方では、ジェーン・ウィットル（Jane Whittle）やプース（L.A. Poos）が述べているように、ほとんど近代のそれに匹敵するような生産形態が存在しておりました。幾つかの場所で資本主義が出現しつつあったという見解は支持し得ないという点で、歴史家達は合意に達しておりますが、封建制から資本主義への移行に関するあらゆる領域の論争に新たな関心が示され始めました。ブリットネル（R.H. Britnell）とクリストファー・ダイヤー（Christopher Dyer）による二つの重要な仕事は、中世全般を取り扱うものであり、それぞれ相異なる学問的伝統から迫るものですが、注目すべきことに、イングランドがこうした流れに沿った発展をかなり古くから示していたという点で一致しております。さらにまた、この二人の見解が一致する点は、このような枠組みは1300年以前に確立しておりましたが、商業化社会としてのイングランドの特色は、1350年から1500年の期間の諸条件の下で、一層形を整え、強化されたという点です。

この過程における最も決定的な要因は、土地を保有している人々と賃金労働者の生活水準が広い範囲にわたって向上したということです。15世紀の中葉には、人々の暮らし向きは良くなり、以前より多くの可処分所得を手に入れるようになり、それを住宅・運搬手段（馬）・衣料・食料（以前よりも肉をたくさん食べるようになりました）・（真ちゅう製の壷やシーツといった）家具調度の改良に使うようになりました。こうした財に対する需要が生産を刺激したわけであります。こうして、皮肉にも、世紀中葉の景気後退は別として、15世紀の経済は、全体の規模はそれ以前よりも小さくはなりましたが、

活況を呈したのです。これは新しい事態の始まりであり、ここから16世紀前半におけるイングランドの経済成長と拡大が再び開始されたのです。独立自営農民、富裕な農民、そして豊かな職人といった新しい中流階層の人々（middling sort）が、農村地域、村々に出現しました。こうした人々は、村や教区の行政にリーダーシップを発揮する地方のエリート階層を形成したのです。

新たに出現しつつあったこうした中流階層の人々のものの考え方、姿勢についても以前よりは詳しく知ることができるようになりました。黒死病の後遺症と対仏戦争の敗北のあと、労働力が不足し、土地保有農民をひきつけることが困難になり、課税と農奴制の桎梏に対する抵抗があらわになり、ついに「大農民叛乱」が起こった14世紀の後半には、社会的移動を押さえつけようとする試みが一斉に出揃いました。社会の上層を形成する土地所有階級は、結局は失うものが最も多く、古い秩序が崩壊することを恐れたのです。クリストファー・ギヴンウィルスン（Christopher Given-Wilson）が指摘しているように、どのような衣服を着るべきかを規定した最初の奢侈禁止法、最高賃金・雇用契約を規定した労働者条例、庶民のスポーツを制限した諸立法、そして1390年の最初の狩猟法を含む1360年から1390年までのすべての立法の根底には、崩壊しつつある封建的慣習と義務に代わるべき国民的な社会統制の規範を押し付けようとする意図がありました。さらに、時を経て、庶民院議員選挙において、誰が投票権を持つのか、あるいは、例えば治安判事の職に就くことのできる資格とは何かを明確にすることを目的とする立法も導入されました。

保守的な心性を持つ人々を大いに悩ませた社会的な移動を阻止することはできませんでしたが、社会的秩序の維持は成功しました。やがて、社会的移動によって最も利益を得ることができた新たな中流階層の人々が、この国民的な規範に体現されているさまざまな価値を信奉し、自らのものにして行っ

たのです。こうして、マージョリ・マッキントシュ（Marjorie McIntosh）が指摘するように、1460年頃から、裁判における陪臣として、また荘園裁判所の役員として、新たな中流階層の人々は、地域的な行動規範、特に性、飲酒、賭け事、スポーツといった領域における行動規範を彼ら自身の共同体に植え付けました。勿論、成功はしませんでしたが、中流階層の人々がそれを禁じる試みをしていることから、われわれは、イギリス人が15世紀に既にサッカーの原型に当たるスポーツをしていたということを知ることができます。働くことを拒否していると中流階層の人々が考えた、救済に値しない貧民や浮浪者に彼らは同情しませんでした。自己責任ではなく、その他の理由で貧困に陥っている、救済に値する貧民に彼らの慈善は向けられました。プロテスタンティズムの興隆のはるか前のこの時代に形成されつつあったのは、中産階級の「尊敬に値すること」（respectability）という規範だったのです。

この同じ規範は、教区というレベルで繁栄したフラタニティ（兄弟団）やギルドにおいて奨励されました。宗教改革以前の教会は腐敗しているという「プロテスタント的な」信仰上の行為や聖職者に対する不満が広がったのは、この時代からほんの30年くらい後のことでした。しかしながら、特にイーマン・デュフィ（Eamon Duffy）やクリストファー・ハーパービル（Christopher Harper-Bill）の仕事のおかげで、中世後期が正統的なキリスト教信仰に強く統一された時代であったということを現在われわれは知ることができます。勿論、14世紀後半の疫病流行による宗教的信念の揺らぎは深刻でした。その結果の一つが、ロラード（托鉢僧）派の台頭であります。この動きは根絶はされませんでしたが、15世紀初頭に当局によってうまく押さえ込まれ、地下にもぐってしまいました。しかし、キリスト教会もまた、個人としての信心を新たに強調し、世俗の人々が自分自身で宗教的な行為を実践するように奨励することによって、こうした事態に対応したのです。これは、聖者崇拝の強化、宗教的献身の様式の発展、死者の魂を慰めるために寄進をすることに至るまで、実に多くの形をとり、尊敬されるべき階層を形成する社会の

すべての階層を通じて、実行されました。上層階級は、自身の私的な礼拝堂を熱心に作り、中流階層の人々はギルドやフラタニティを重視しました。こうした動きが、どれほど実際に深くキリスト教の信仰に関わっていたのか、表面的な見せ掛けのものであったのか、それはわかりません。死亡率が極めて高く、生きていくことが現在よりもずっと心許なかった中世後期という状況の下では、宗教への傾倒が強化されたとしても、それは驚くにはあたりません。しかしながら、重要なのは、こうした傾向がはっきりと、明示的に、世俗化を志向していたという事実であります。新たな事態は、世俗の人々が自分自身の宗教に積極的に参加し、基本的な教義を理解し、自分達の救いを実現するために、最早、聖職者の閉鎖的な領域にそれを全面的に委ねることをやめたということであります。

政治社会も14世紀中葉の危機に影響を受けました。フランスにおける戦争は自由意志から出たものであり、一方の疫病はそうではありませんでしたが、この二つの要因はイギリスの政治制度に影響を与えました。どのような影響を与え、なぜそうなのかについては、これまで多くの論争がありました。エドワード３世、そしてその前の彼の祖父であるエドワード１世が、イギリス人を、攻撃的、かつ、今日の言葉で言えば、イギリスとフランスにおける「帝国主義的」な戦いに巻き込むことによって、重要な変化をもたらしたという見解が一方にあります。リチャード・キュウパー（Richard Kaeuper）が指摘するように、戦争国家が形成され、そこでは、統治機構の官僚制が拡大し、官僚機構のすべてを賄うための租税を徴収する制度として、議会が発展しました。14世紀と15世紀の諸戦争を経験するなかで、中央集権国家としてのイングランドが形作られたのです。この見解は、次のような古い見解を退けることになりました。即ち、エドワード３世はフランスにおける彼の野心を実現するための支持を取り付けようとして、彼の臣民、特に上級の臣民に重要な譲歩をし、そのことが臣民達に国王の支配からの自由を以前にまして与えてしまった（遂にばら戦争という恐ろしい結果を招いてしまった）の

だという見解であります。新しい見解は、ジェラルド・ハリス（G.L. Harriss）が提起し、アンソニー・マッソン（Anthony Musson）とマーク・オームロッド（Mark Ormrod）によって補強された解釈にも沿うものであると考えられます。すなわち、資源を最大限に動員しなければならない戦争を遂行し、国王が社会経済的な規制にますます介入してくることは、政府の権限と仕事の範囲を拡大し、国王と地方のエリートとの連携の強化を促したのです。

こうして、法制度が拡大し、新しい俗人の治安判事が作り出されました。治安判事は、（新たな社会統制の規範を含むような）地方における治安管理の責任をますます担うようになりました。軍隊の召集は、徴兵契約制度を通して、国王の上級の臣民に委ねられるようになりました。中央政府自体は、以前よりも一層調停機関としての性格を強め、管理行政が複雑になるにつれて、国王の上級の臣民は、自分達がそこに参加する権利を有すると信じるに至りました。このような事態の展開が、エドワード3世による臣民の支持を得んがための譲歩の結果なのか、それとも押し止めることができない統治機構の勢力範囲のあくなき拡大の結果なのか、そのどちらなのかは、結局のところ、多分重要ではないでしょう。結果は同じです。王国を治めることが以前よりも困難になっただけです。どの国王も、王権の絶対性を謳う理論を放棄しようとはしませんでしたが、現実には協調の下に支配するほかなかったのです。エドワード3世はこれを見事にやり遂げました。リチャード2世はエドワード3世よりも絶対主義的な理論に回帰し、その付けを払わなければなりませんでした。ヘンリー4世は、その立場の脆弱性と肉体的な弱さにもかかわらず、祖父の政治手法を回復することに成功しました。ヘンリー5世は、極めて強い人格の力で、権威と霊感を持って統治しました。そして、哀れなヘンリー6世は、全く統治能力を欠いておりました。このような極く簡単な素描によっても、統治が成功するかどうかは、王たる人間の性格に少なからず依存していたということがわかります。ばら戦争は、戯画化して言え

ば、統治という仕事が以前よりも複雑になり、不幸にも国王が統治能力を持っていなかった時に起こったともいえます。

政治的な物語にこれ以上深入りすることはやめて、政治を分析することに戻りたいと思います。政治は、所詮、権力と恩顧（patronage）、権力を握る者と追放される者に関わるものであったという主張がかつてなされてきました。しかし、後にジョン・ワッツ（John L. Watts）の一連の論文のなかで一層発展した形をとるようになったエドワード・パウエル（Edward Powell）の刺激的な論文によると、理念とか原理・原則といったものが、中世後期イングランドの政治においては、重要であったという見解が現在では受け入れられるようになりました。こうした理念や原理・原則といった問題は、フランスとの戦争と平和の問題、一般的な外交政策、法と秩序の効果的な維持、正当な、あるいは「くだらない」国王の助言に従うことに関わるものでした。ワッツが強調するように、たとえば、ヨーク公リチャード（Richard, duke of York）や国王擁立者のウォリック（Warwick）伯といった排斥された政治家たちによって発せられた反論の言語は、従来よりも広い範囲の聴衆に訴え、従って、どれだけ誠実であったかどうかは別として、原理・原則という言葉で表現され、実際に彼らはそれに基づいて行動しました。この原理・原則という点は、究極的には、国王の権力は制限されないのか、国王は公共善を守る唯一の人間なのか、それとも公共善という名の下に、臣民によって制限されるのかといった問題に関わっておりました。これは繰り返しおこるテーマであり、リチャード2世の治世にも表面化し、1399年の彼の廃位によって、ある意味では一時的に解決されましたが、1459－60年に再び現れ、1485年以降初期テュダー王朝によって、最終的に、国王に有利な形で解決されました。

最後に指摘しておきたいのは、政治的な協力関係と政治への参加が、伝統的な上流支配階級を超えて広がったという点であります。また、新たな中流

階層の人々も登場してきました。州でも、庶民院選挙区としての都市でも、多くの人々が選挙権を獲得し、庶民院議員選出に投票しました。その結果、特に庶民院議員選出の実権が国王や地方の封建領主に握られているポケット腐敗選挙区にならなかった小規模の都市では、庶民院議員として選出される者も出てきました。特にヘンリー4世治世の極めて強力な議会に彼らの声は反映されたと私は思いますし、この点について書いたこともあります。彼らは、議会の外では、執行官（シェリフ）を補佐する役職者であるベイリフ(bailiff)、徴税官、事実審・死因審問、あるいは荘園裁判所の陪審、村の治安官、教会委員として地方の行政を担いました。普通の人々の政治への参加は、連続的、かつ永続的でした。彼らは租税を支払いましたから、政治的な意見を持ち、時にはそれを表現しました。彼らは政治過程に関与し、それを構成する一部であるという考えを持つに至りました。国王の布令や目に見えるお触れ書きを通じて政策を実行することを公布し、正当化する試みをしていることから考えて、国王はこのことを認めていたと考えられます。

従って、外国で戦争をすることに成功し、国内では治安管理機構を改善したヘンリー5世のような国王は人気があったのです。どちらも実行しなかったヘンリー6世のような国王は、人気がなかったし、1450年の大規模な叛乱に直面したのです。「平時」には、地方行政を遂行したその同じ人々が、次の世紀の間中何回も起こった叛乱をそれぞれの地方で指導しました。1450年に初めて現れた彼らの宣言は、こうした人々が政治的な見通しとイデオロギーを信奉していたことを示しております。このことは、公共の福祉、あるいは1450年に宣言という形で最初に明確に表現された公共善、そして公共善を維持する国王の義務を彼らが信じていたことを示しております。国王、あるいは当時の表現が示すように、国王の邪悪な閣僚達が公共善を維持しない場合、叛乱は正当化されました。彼らは、自分達が国王自身の最良の利害を考えて行動する国王の忠節な野党であると考えていました。ヨーク公リチャードや国王擁立者のウォリック伯、特にウォリック伯は、マイクル・ヒックス

（Michael Hicks）が述べているように、15世紀中葉に、こうした一般的な政治を自分達の大儀に従わせることを逡巡しませんでした。

最近における中世後期英国史研究は以上述べたような方向でなされてきました。お気づきになるように、私が強調したテーマが一つあります。それは、中流階層の人々の出現です。この語句、つまりその記号表現は、16世紀まで現れませんでした。しかし、実体はそれより前に存在していたのです。中流階層の人々は、黒死病時代のあとに現れた新しい経済秩序の産物でした。彼らは、尊敬されるべきこと、謹厳さを信奉し、救済に値しない貧民には同情しませんでした。彼らは、自分達よりも上位の人々に敬意を表しました。彼らは、熱心なキリスト教徒であり、自分達自身の宗教的組織を管理しようとしていました。彼らは地方の行政官であり、政治に積極的に参加しました。そして、彼らは自分たち自身の政治的な見通しを持っておりました。さらにもう一つ、彼らはイングランド人であることに誇りを持っておりました。彼らは母国語で読み書きし、外国人、特にフランス人を嫌いました。しかし、それだけではなく、ウェールズ人、アイルランド人、そしてスコットランド人を嫌いました。自分が資本家として生活している社会がどんな社会であるかを描くことに躊躇を感じるのとまさに同じように、自分達を中産階級であると呼ぶことにはためらいがあります。しかし、彼らは後の時代にイングランドの中産諸階級となるであろう人々の魁でした。従って、中世後期、特に1450年以降にわれわれは先の時代の予兆を見て取ることができます。C.L.キングスフォード（Kingsford）は、80年ほど前に、『15世紀イングランドにおける偏見と約束された未来』という後の世代に大きな影響を与えた講義集を公刊しております。彼は、偏見は歴史解釈の中に存在し、約束された未来は社会自体の中にあったと主張しています。この時代は、近代のイングランドのルーツが形成された時代でありました。それは、16世紀中期のローマ教会との断絶とプロテスタンティズムの押し付けが、過去のイングランドの多くを消し去る前の「楽しきイングランド」（Merry England）として理想

化された時代でした。しかし、中流階層の人々は勢力を伸ばし続け、やがてやかましいほどプロテスタント的に、さらには傲慢なほどイングランド的になったのであります。未来は、彼らの手に渡されたのです。

参考文献

R.H. Britnell, *The Commercialisation of English Society* (Manchester University Press, 2nd edn., 1996)

Samuel Cohn, *The Black Death Transformed: Disease and Culture in Renaissance Europe* (Oxford: University Press, 2002)

Eamon Duffy, *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England, 1400-1580* (New Haven, 1992)

Christopher Dyer, *Making of Living in the Middle Ages: the People of Britain, 850-1520* (New Haven, 2002)

Christopher Given-Wilson, 'Service, Serfdom and English Labour Legislation, 1350-1500', in Anne Curry and Elizabeth Matthew, eds., *Concepts and Patterns of Service in the Later Middle Ages* (Woodbridge, 2000)

G.L. Harriss, 'Political Society and the Growth of Government in Late-Medieval England', *Past and Present*, 138 (1993)

Christopher Harper-Bill, *The Pre-Reformation Church in England, 1400-1539* (Harlow, 1989)

J.A. Hatcher, 'England after the Black Death', *Past and Present*, 144 (1994)

J.A. Hatcher, 'The Great Slump of the Mid-Fifteenth Century' in R.H. Britnell and J.A. Hatcher, *Progress and Problems in Medieval England* (Cambridge, 1996)

Richard Kaeuper, *War, Justice and Public Order: England and France in the Later Middle Ages* (Oxford, 1988)

Marjorie McIntosh, *Controlling Misbehavior in England, 1370-1600* (Cambridge, 1998)

Anthony Musson and Mark Ormrod, *The Evolution of English Justice: Law, Politics and Society in the Fourteenth Century* (Basingstoke, 1999)

A.J. Pollard, 'The Lancastrian Constitutional Experiment Revisited: Henry IV, Sir John Tiptoft and the Parliament of 1406', *Parliamentary History*, 14 (1995)

A.J. Pollard, *Late-Medieval England, 1399-1509* (Harlow, 2000)

L.A. Poos, *A Rural Society after the Black Death: Essex, 1350-1525* (Cambridge, 1991)

Edward Powell, 'After "After McFarlane": the Poverty of Patronage and the cases for Constitutional History', in D. Clayton and others, eds., *Trade, Devotion and Governance: papers in late medieval history* (Stroud, 1994)

J.L. Watts, 'Ideas, Principles and Politics', in A.J. Pollard, ed., *The Wars of the Roses* (Basingstoke, 1995)

Jane Whittles, *The Development of Agrarian Capitalism: land and labour in Norfolk, 1440-1580* (Oxford, 2000)

（2003年12月）